

2 神経疾患でiPS創薬

認知症と数年内に治験 ハンチントン病

ケイファーマ

慶大発新興

慶応大学発ベンチャーのケイファーマは、人工多能性幹細胞（iPS細胞）を使った創薬事業で、数年内に新たな臨床試験に入る。患者由来の疾患特異的iPS細胞で既存薬のスクリーニングを行って見いだした筋萎縮性側索硬化症（ALS）の新規治療薬候補に続き、認知症など2つの神経疾患で新薬候補化合物を選定した。同社は昨年10月に東証グロース市場に新規株式上場し、調達資金を今後の開発費用などに充てる考え。福島弘明代表取締役社長は「上場を機にギアを上げ事業を飛躍させる」と意気込む。

上場機に飛躍、製薬連携も

ほど難治性神経疾患であるALS治療に有効な可能

る前頭側頭型認知症、ハンチントン病に対する新S治療薬としてのロピニロールの国内開発・販売だ。臨床試験の準備を進め、開発、販売面で製薬企業との提携も視野に入

る。ALSは日本市場が約250億円規模である一方、欧米で約9450億円、中印で約3550億円を計上した。2020年代後半の実用化を目指す。

もう一つの事業の柱である再生医療事業では、亜急性期の脊髄損傷患者にiPS細胞由来神経前駆細胞を移植する第1/2相臨床研究を慶大が実施している。終了次第、ケイファーマが企業治験を実施し、早期の条件及び期限付承認を目指す。

生医療のバイブラインは、慢性期の脊髄損傷、脳梗塞、脳出血、外傷性脳症への拡大も狙う。上場による調達資金は、臨床試験の実施のほか、米国拠点の立ち上げにも充当する。ポストンを候補地に、24年に新規

生医療事業も含め、当面はアンメットメディカルニースの大きい難治性神経疾患に注力するが、将来的にはノウハウを蓄積してアルツハイマー病や脳梗塞など、「大市場にも切り込んでいく」と意欲を示した。



福島社長

iPS創薬事業では、患者の組織から作製し遺伝情報

を保有する疾患特異的iPS細胞を使い、1200を超える特許切れの既承認低分子薬ライ

ブラリによる薬剤スクリーニングで、標的疾患の導治験で、パーキンソン

病薬「ロピニロール」が丸の市場が見込まれる。

丸の市場が見込まれる。

ラボを設立する計画。将来の成長のため、新たなことにいち早く取り組むことが重要（同）として、世界最大のライフサイエンス市場で最先端モダリティの探索研究を行う方針だ。

丸の市場が見込まれる。

丸の市場が見込まれる。